

『特殊的生产』について

——「資本論」における保管費・運輸費の検討——

小 牧 聖 徳

一、序

二、生 産

三、使用価値と有目的効果

四、価値形成

五、特殊的生产

六、生産過程及び流通過程との関連

七、むすび

一、序

流通費はもともと、社会にとっては再生産のための必要な費用であるが、止むを得ない出費である。流通費がただ価値実現のための止むを得ない出費であるだけならば問題はない。その場合には流通費は、社会に

於る剰余価値から支払はれ、剰余価値からの控除によつてこの流通費は充当される。したがつて価値の社会的増加は起らない。ところが流通費のうちにも純粹の流通費ではなくて、ある特殊な流通費がある。保管費および運輸費がこれである。

この保管費、運輸費の問題をわれわれはマルクスの価値論の見地より考察したい。それは価値論は経済学に於ては理論の礎石を形成するものであるから。ついで保管費、運輸費が単に生産過程にのみ属するものではなく、また同じように流通過程にのみ属するものでもなくして、二面性、分裂性を有している点にも注目

し、これを特殊の生産として把握するのが、これらの流通費の特異性を描出する一方法ではなからうかと考へる。ここでは先ず最初に生産について触れ、ついで使用価値と有目的効果、価値形成、特殊の生産、生産過程と流通過程との関連、結び、と進むのが小論の叙述の順序である。「註」をやや多く使用したのは、本文における不明確さを、補い得たらばとのささやかな念願からにはかならない。

二、生産

資本制生産様式が支配的に行はれる社会での生産は、商品生産であり、したがつて使用価値・価値の生産であり、且、剰余価値取得を目的としたる生産である。ただ単に使用価値のみの生産であれば、それは歴史的且社会的な制約を受けず、何時、如何なる処にも存在するであろう。この生産が交換を目的として行はれる様になると、該生産物は商品となり交換価値として現象するようになる。これは商品生産である。更に商品

生産が剰余価値取得を目的として行はれるようになることによつて、商品生産の資本制的形態となるのであるが、このような生産は、価値の観点より見れば価値増殖的であり、前の場合の生産は価値形成的である。この価値形成、価値増殖はその基底として使用価値の生産を包含していることは言うまでもない。マルクスが生産過程をば労働過程と価値形成(増殖)過程との統一として把握しているのは商品生産の故であろう。^①

ここで生産というのは、商品生産であり、生産過程において、使用価値の生産を包含したところの価値形成(増殖)の場合を意味するのである。

註① 「ひととは見る——使用価値を創造するかぎりでの労働と価値を創造するかぎりでの同じ労働との区別は、いまや生産過程の相異なる側面の区別として現はれたというところを。労働過程と価値形成過程との統一としては、生産過程は商品の生産過程である。労働過程と価値増殖過程との統一としては、それは資本制生産過程であり、商品生産の資本制的形態である」(長谷部訳

「資本論」一ノ二、一〇八頁。

三、使用価値と有用的効果

流通過程においては、商品の姿態変換が行はれるのであるが、前にのべたような生産という意味を持たないことは言うまでもない。ところがこの流通過程に属するが如く現象する保管費^②、運輸費^③は生産的性格をもつのであるが、流通過程に属するが如く現象せざるを得ない如く、やや趣を異にしたる生産的なのである。すなわち運輸、保管の場合においては、商品の場所的移転あるいは時間的維持保存が直接の目的であり、このことは使用価値に関して言えば、商品に対して加えられた変革はその過程の終りには商品の使用価値には何等の痕跡をも残さない。ただ場所的移転あるいは時間的維持が存するだけである。だから商品の使用価値そのものについては、運輸保管の作業が加えられる以前と以後では少しも変化がない訳である。

この点について河上博士は次のようにのべていら

る「その（保管の）ために費された労働は、生産物の使用価値を保存し、少くともその減少を防ぐ作用をなすのであるから……生産物はこれ（運輸）によって場所的移転をなすことにより、その使用価値を増加するのであり、それは最後の消費者の手に入ることにより、始めてその使用価値を実現しうるのである」と。（改造社版経済学全集第一巻二六七―八頁、傍点小牧）

これによると商品は移転によつて、その使用価値を増加することになる。言うまでもなくすべての商品は生産者にとっては非使用価値であり消費者にとっては直接に使用価値である^④。だから商品が使用価値として実現される為には場所的移転あるいは時間的維持が不可欠であるかも知れない。だが注意すべきは「商品が自らを諸価値として実現する前に諸使用価値である実を示さなければならぬ。けだしそれらに支出された人間の労働は、それが他人にとって有用な形態で支出されている限りでのみ計算に入るからである^⑤」とある如く生産されたときに使用価値である実を示さない、

すなわち有用でない商品は、消費者にとつても有用たり得ない。有用たることは誰の手にあるときに於てもかわりはないが、それが生産者以外の手によつて消費實現されるのが商品の宿命なのである。^⑥

だが更に根元的に見るならば特定の人間に対する有用性が使用価値なのではなくて、有用性を起させるその根源をなすものが使用価値なのである。だから『ある物の有用性は、そのものをして使用価値たらしめる』^⑦（傍点、小牧）のであり、有用性それ自体が使用価値なのではない。すなわち有用性と有用性を有するものは同一物ではない。ここで有用性と使用価値との関係が問題となる。すなわち有用性は使用価値と同一のものであるか、あるいは別個のものであるかという問題である。もし同一物であるとするならば有目的効果を生産する運輸、保管作業は使用価値を生産することになる。もし有用性と使用価値とが相異なるものであればその相異なる点が明示されなければならない。これについては戦後、種々論争されたようである。すなわ

ち使用価値を有用物と考えるか有用性と考えるかという点である。これについては「ある物の有用性はそのものをして使用価値たらしめる」とある如く、物が人間との関係においてあらわす属性、有用性—かかる有用性をあらわす物が使用価値なのである。^⑧この点から見ると有目的効果は有用性であり、この有用性そのものは使用価値ではないが、この有用性をあらわす物は使用価値である。したがつて運輸、保管を可能ならしめる物（汽関車、倉庫其他）は使用価値であるが、それによつて表はれる効果は有用性ではあるが、有用性をあらわす物ではない。したがつて有目的効果たる運輸、保管は、有用性をあらわす物自体ではないから使用価値ではない。ここに於て使用価値と有目的効果とは必ずしも同一物ではないことを見うる。

さて河上博士の、商品は移転によつて使用価値が増加するという見解に立歸るならば、博士はこの運輸の有目的効果（有用性）を使用価値と同一物として把握しておられるから、運輸によつて有目的効果が生産さ

れ使用価値が増加するとされる訳であろうが、運輸以前に存在していた商品の使用価値が、運輸によって消失しない如く、運輸によって増加もしない。使用価値としては、避くべからざる自然的磨損等を別とすれば、運輸の前後によって何らの変化も生じない。ただ運輸は商品の使用価値実現についての準備的段階を形成するのみであつて使用価値を創造するものではない。だから商品の場所的移転が、その商品にとつてたとえ不可欠であるとしても、使用価値そのもの、言いかえると有用性をあらわす物の増加は商品の中に生じないのである。商品そのものの変革が使用価値の変革なのであり、商品の変革の反映が使用価値の変革を生ぜしめるのである。商品の場所的变化は、使用価値の場所的定在が変化するから、その使用価値における一つの変化が起るけれども、定められた場所に到着すると、商品の使用価値内に何らの痕跡をも残さない。だから使用価値の増加というものはあり得ないのである。

さて使用価値に関しては、運輸、保管は商品中に積

極的に痕跡をのこさないのである。したがつて生産過程における労働過程の成果は、商品そのものの変化として、商品それ自身の中に表はれないという点に、運輸、保管作業の特異性がある。尤もこれらの作業は、商品をその最終的消費に至らしめるまでのある一定期間、生産された当時の屬性を維持し保存させる為に保管し、あるいはそれが消費される場所へそれを移動させる為に運輸し、役立つことは言うまでもないが、商品それ自身の屬性を変えることを目的としていないという点では、保管、運輸は同一であり、したがつて一般的な生産とは、やや趣が異なつている訳である。もっとも漁業等においても、魚類そのものを魚類そのものとして、何等の変革を与へることなく採取するわけであり、採鉱、狩猟、漁撈等々、自己の労働対象を天然に見出す採取産業^⑥については一般的に、労働対象の採取を意図するものであつて、そのものの変革を意図したるものではない。労働対象の中に於ての変革を意図しない点に於て、運輸、保管作業との間に類似点は存するが、根本的な相違点は、使用価値の点に存す

る。すなわち採取産業については、使用価値すなわち有用性あるものの積極的增加であるが、他方運輸、保管作業に於ては、有用性あるものの単なる移転、維持にすぎないのである。過程の終りに於て、一方は使用価値の増加があるが、他方には使用価値の増加の痕跡はない。このように労働対象それ自身の中に変革の痕跡をのこさず、使用価値の増加となつてあらわれない

点が、保管、運輸をして流通過程に属する様に現象させる原因でもある。なるほど運輸、保管は商品それ自身の中に、労働過程の痕跡をとどめてはいないけれども、しかし商品が商品としての本来の使命を全うする、すなわち消費されるためには、絶対に欠くことの出来ない作業であり、大部分の商品は生産されたままで運輸されることなく、あるいは又保管されることがなければ、商品として流通することは出来ない^④。保管、運輸が行はれなければ、商品が商品たることを得ないわけであり、また逆に言えば商品が商品たる限りにおいては、運輸、保管は絶対不可欠な作業である。このこ

とは保管、運輸が他の商品生産のように使用価値そのものを労働の具体的に対象化されたものとして生産しないけれども、有・用・的・効・果——時間的維持保存、場所的移転——を生産することをさまたげない。換言すれば有・用・的・効・果を生産する訳である。これは使用価値の増大には参加しない点は既に述べた如くであるが、使用価値の実現に便ならしめられるのである。

註① 『流通あるひは商品交換は何らの価値も創造しないのである』(長谷部訳「資本論」一ノ二、三八頁)。

② 『これらの流通費は生産諸過程——流通に於いてのみ行はれる、かくしてその生産的性格が流通形態によって隠蔽されているにすぎない。生産諸過程——に起因しうる』(同書、二ノ一、二五九頁)。

③ 『運輸業は……流通過程の内部での且つ流通過程のための一生産過程の継続として現われる……』(同書二ノ一、二八八頁)。

④ 「すべての商品は、その所有者にとつては非使用価値であり、その非所有者にとつては使用価値である」(同書一ノ一、二八一頁)。

- ⑤ 同書、一ノ一、二八二頁
- ⑥ 商品生産者は他人の為の使用価値をつくる。けれども生産者の手に於て使用価値たり得ないものが、消費者の手で如何にして使用価値たり得ようか。現実に実現するのは消費者であるが、それ以前に使用価値たらねば、消費者は使用価値として実現することは不可能である。
- ⑦ 長谷部訳「資本論」一ノ一、一七三頁
- ⑧ 同書 二ノ一、一〇六頁
- ⑨ 社会思想史研究会「戦後『資本論』研究の諸潮流」季刊理論一、一〇〇頁
- ⑩ 長谷部訳「資本論」一ノ二、七五頁
- ⑪ 商品によっては運輸を要しないもの例えば家屋や、保管を要しないもの、例えば注文生産等も存する。だがこれらは保管、運輸に関係のない商品であるから、こゝでは我々の考察の範囲外にある。
- ⑫ 保管を要する商品在荷には、継続的販売の条件としてのもので、商品が販売され得ない結果としての在荷と二種類ある。商品在荷の正常形態と異常形態との限界は、信用制度の発達により、現実に於ては明確ではないが、商品在荷の異常形態より生ずる(販売され得ない

結果として生ずる)保管費は商品価値を高めない。これは通常の流通費と同じである。小論で取扱う保管費は商品在荷の正常形態におけるものについてである。

四、価値形成

資本制生産様式の下では、使用価値の生産したがって労働過程は、同時に価値の生産、したがって価値増殖の過程でもある。

ところが保管、運輸は商品の使用価値内に直接の麥革を与えない。だから運輸、保管においては使用価値の生産がなく、従つてそれが価値の生産として表はれないかの如くに思はれる。けれども保管、運輸に対しては明かに社会総労働の一部分が投入せられているのであり、またこのような労働の投入がなければ、商品はその最終の消費にまで、全き姿で到達することは不可能であろう。その意味でなるほど、商品それ自身の中に、積極的な変革の跡をとどめてはいない作業ではあるが、このような作業あることにより、商品の使用価値は消費実現されるのである。かかる有目的効果

の故に、保管、運輸は価値の単なる形態変換ではなく、生産過程の継続と見なされるわけである。而して労働は価値の実体を形成するのであり、生産過程の継続として価値を追加する労働は、又剰余価値をも追加するのである。^① しかば運輸、保管における価値形成はそれと同時に、果して富の増加を意味するのであろうか。富とはすなわち使用価値である。「使用価値は、富の社会的形態がどうあろうとも、その富の質料的内容をなす」^②。価値形成が同時に使用価値形成を意味するのであればそれは富の増大になるであらう。けれども価値形成が使用価値をとまなわなければ、価値の形成は富の生産を意味せず、むしろこれは社会全体における使用価値の相対的な減少ということにすぎないであらう。何となれば使用価値—富—の生産がなされずして価値が高められたわけであるから。而して全体としての使用価値、したがって富の総量には、変化は生じてはいないのである。逆に言えば保管、運輸は富のすなわち使用価値の増大ではないけれども、保管費、

運輸費はその価値の大きさだけ商品の価値を高めるわけであり、したがって富の価値の増大となるであらう。^③

註①

保管費については「使用価値はこの場合には高められも増加されもせず、むしろ減少する。だが、その減少が制限されるのであり、かくして使用価値が維持されるのである」(長谷部訳「資本論」二ノ一、二六四頁)。

運輸費については「運輸によつて生産物の自然的諸属性の変化されることがありうるが、この変化もまた特定の例外こそあれ何ら意図された有目的効果ではなく、むしろ不可避的な害禍である」(同書二八四頁)。

②

保管費については「社会的に考察すれば単なる費用であつて労働—生きた労働であれば対象化された労働であれ—の不生産的支出でありうるが、しかしそれ故にこそ個別的資本家にとっては価値形成的に作用しえ、彼の商品の販売価格の一追加分をなしうる」(同書二五九頁)。とあり、運輸費については「運輸によつて商品に追加される価値の絶対的太いさは……」(同書二八六頁)。とある如く兎に角、兩者共価値を追加する労働が夫々投入せられている。商品の形態変換のためにも社会総労働の一部が投入されているが、

形態変換の行はれるのは流通過程であり、流通過程に

おいては価値も、したがって剰余価値も創造されない。

そこでは価値が実現されるだけである。流通部門に社

会総労働の一部が投入されればされるほど反対に生産

過程に投入せられるべき社会総労働が減少するわけ

である。これに反し価値は本来生産過程に於て創造され

るのであり、価値形成過程と、使用価値に対応する労働過程は統一

体として生産過程を構成している。この

労働過程が使用価値を生産せずして有目的効果を生産

する点にこそ、運輸、保管が本来の生産過程と相異せ

る特異性がある。けれども生産過程たることを否定する

ものではない。

③ 保管費については「価値を追加する労働はすべて剰余

価値をも追加しうるのでありまた、資本制生産の基礎

上ではつねに剰余価値を追加するであろう」（同書、二

六〇頁）。運輸費については『運輸業において投下さ

れた生産資本は、運輸された諸生産物に価値を追加す

る——一部分は運輸機関からの価値委譲により、一部分

は運輸労働による価値追加によって。この後にあげた

価値追加は、すべての資本制生産において然るのと同

様に、労賃の填補と剰余価値とに分裂する』（同書、

二八四頁）。

④ 長谷部訳「資本論」一ノ一、一七三頁。

⑤ 保管費のうちで注目すべきは、商品が販売し得られざ

る結果すなわち商品在荷の異常形態のために生ずる保

管費は、姿態変換の困難から起るのであり、商品価値

を高めるよりむしろ価値の実現にあたっての控除をな

す。けれども正常形態での在荷の保管費は商品価値を

高める。（同書二ノ一、二八一頁参照）。

⑥ 富に関連して再び使用価値が問題になるが、物と人間

との関連において、物自体に存する性質が人間の利用

によって欲望を満足させる。だから物自体に存しない

性質は、使用価値を形成出来ない。人間はものの有用

性を発見出来るが使用価値は物を離れては存しない。

物そのものの有用性、しかも物自体の中に存するもの

こそが使用価値である。歴史的に利用の仕方を見出す

来れば（長谷部訳「資本論」一ノ一、一七二頁参照）

社会的にも発見出来る。発見するのはそのものが存す

るからであり、発見する以前に存していたものが発見

によって直接確認されたまでであり、存在は確認以前

にさかのぼる。移転、維持は確認を可能ならしめるけ

れども、創出するのではない。観念的に創出すること

は無限であるが物に結びついた創出は物を離れては存しない。物は有用性を確認されて使用価値となり、確認されざる単なる存在としての事物と区別され得る。けれどもこの確認も特定人の確認を意味するのではなく、所謂人々の確認を意味する。もしそうでなければ商品としての使用価値の交換は起り得ない。人は無用なものを取得しないだろうから。尙有用性（効用）は所有者によって増減するけれども有用性をあらわす物、すなわち使用価値は、所有者の如何によつて増減することはない。當についても亦然り。

五、特殊的生产

生産過程の継続、或は追加として時間、空間の克服にかかるこれらの費用を把握することこそ、したがって單純に生産過程、流通過程としてではなく、生産過程の継続として理解することこそ、この保管費、運輸費の性格を明確ならしめる所以であろう。

單なる生産過程に属せしめないのは、運輸、保管における生産が、其他の普通の意味における生産過程と、

その生産せられるべきものにおいて、やや異なつてゐるからに外ならない。一方、流通過程中にこれを見ないのは、これらの費用は、普通の流通費^①が剰余価値からの控除を意味するのに対し商品価値に実費として追加されるものであり、またそれ故にこそ剰余価値を生産するものであるからである。

かくして特殊的生产というのは、価値形成的に見て一般性を欠くことを意味しない。それは直接的搾取の源泉をなしている訳であり、その限りにおいて一般性を有しているわけである。けれども商品価値を高めはするが、それが直ちに使用価値の増加を意味しないことは見のがされてはならない。それが価値形成的でありながら、専ら商品の場所的移転、あるいは時間的維持を本来の目的としており、使用価値そのものの中には、変革は生じない。その意味で有用的効果の生産ではあるが使用価値の生産ではない。

生産過程の継続として保管、運輸を把握すべきであるとのべたように、これは量的にすなわち価値形成的

に見れば生産ではあるが、質的にすなわち使用価値形成的に見れば、純然たる生産ではなくて有目的効果の生産という特異性を有している。

註① 普通の流通費というのは「かかる流通費は、価値を実現するための、あるいは一の形態から他の形態へ価値を転應するための、単なる費用である。これらの費用に支出された資本は資本制生産の空費に属する。この空費の填補は剰餘価値から為されねばならぬ……」長谷部訳「資本論」二ノ一、二八二頁」といふが如き流通費のことである。

② 商品価値に実費として追加される保管費のうちに於て例外をなすのは、商品在荷の異常形態より生ずるところの保管費である。これは商品と貨幣との姿態変換の困難から生ずるのであり、商品価値に入りこまないで価値損失をなす。（同書二八一頁参照）。

③ 資本は剰餘価値を取得するが全資本が全部剰餘価値を生産するのではない。商人資本、利子生み資本等は剰餘価値の分配にあづかるのであり自ら創造はしない。生産過程を資本循環の中に含んだ資本のみが価値を創造し剰餘価値を創造する。

六、生産過程及び流過程との関連

次に保管費、運輸費は、その価値形成的なるしたがって価値増殖的なる性格^①の故に、生産過程に属すべき性格を有しつつ、流通費の一部として叙述せられていくる点に注目して、生産過程及び流過程の見地よりこの特異な流通費を考察したい。

いうまでもなく価値増殖を推進的動機として生産過程と流過程とは、現実には一つの統一体として循環している^②のだから、これを生産過程、流過程という如く機械的に分離するのは正しくない。「資本は流通からは発生し得ず、また同様に、流通から発生しない訳にもゆかない。それは流通において発生せねばならぬと同時に、流通において発生してはならぬ^③」と述べてある如く、流過程と生産過程は相互に不可分の関係にあるのであるが「商品生産者が流通の外部で、他の商品所有者たちと接触することなしに価値を増殖し、従って貨幣あるいは商品を資本に転化するという

ことは不可能である」が故に生産過程は価値創造の場であり、流通過程は実現の場であり、その両者の統一が資本の総過程なのである。

ところで流通費を形成するということは、流通過程に属するが故に流通費を形成するのである。すなわち価値を本来実現すべき場に属しており、その実現のために必要な費用を意味するのが流通費である。

けれども流通過程に属すべき流通費でありながら、単に価値実現のための費用ではなくて、価値を形成する特殊な流通費がすなわち、保管費、運輸費である。これは流通費ではあるが、生産過程の継続であつて、流通過程に属しているように現象するだけである。

この生産過程の継続と、生産過程、流通過程との連関は、流通過程及び生産過程がその内容、形式ともに本来の過程に属するものとすれば、生産過程の継続は、形式的には流通過程に属しつつ、内容的には生産過程に属するものとして区別し得られよう。このような二面性、分裂性を有するが故に、資本論に於ては、保管

費、運輸費が純粋な流通費とは別個に特に取上げられているのであろう。

さて流通費の一般法則^①よりすれば、流通費は商品の形態変換すなわち実現の費用である。ところが運輸費、保管費は流通費にして且価値を形成する。それが流通費として論じられているのは、商品流通にともなつて、商品が場所的移転あるいは時間的維持を必要とする場合^②には保管、運輸費が、この商品流通の為に支出されて、同時に流通をとまなうから、流通過程に属する如く現象する。この為に保管、運輸費を流通費として論じたと解するのもまた、かかる特異な流通費についての一つの見方であろう。

現象的に流通費に属するように見える保管費、運輸費を、流通費というその形式的な面にのみとらわれて、価値実現の為の単なる空費であるとすることは、明かにあやまりであろう。また反面、単に、生産過程をその内容とするという理由で、一がいに生産的であると形付けて了うことは、研究方法に照応して、その叙述

の形式、順序を重視している資本論の厳正な叙述の形式順序に沿はないであろう。

このような二面性、分裂性をもつ保管費、運輸費の特異な性格は、これを特殊の生産という概念で表現することに、純然たる生産過程に属するものとの関係を、明確にし得るであろう。

註①四 価値形成の註③参照

②「流通過程を社会的再生産過程の媒介者として考察することにより資本制生産過程は全体として考察すれば生産過程と流通過程との統一である」(長谷部訳「資本論」三ノ一、一〇一頁)。

③ 同書 一ノ二、四三頁

④ 同書 一ノ二、四二頁

⑤ 三、使用価値と有目的効果の註②④参照

⑥ この形式、内容というのも本来は統一をその背後に於て予想しているものであり決して別々に分離出来るものではない。けれども人間を精神、肉体という如くに本来分つ可からざるものを便宜上分離して考察するのにならつて、形式内容という面より見ようとするものである。

⑦ 『商品の形態転化からのみ生ずるすべての流通費は、商品に対しては何らの価値も追加しないということ、これが一般的法則である』(長谷部訳「資本論」二ノ一、二八二頁)。

⑧ 商品流通は家屋、土地の如く物理的移転を要しないものもあるが、かかる商品は運輸に關係ないから論外とする。又商品にあらざる単なる生産物の場所的移転も、当面の問題とならない。更に所有名義が流通している時に、倉庫内にある商品そのものを維持する為に保管費が必要となる。これは商品そのものが場所的移転を伴はずして流通するが故に、前者(運輸費)に代つて必要となれる費用である。

⑨ 長谷部訳「資本論」一ノ一、三七—八頁、一三四—五頁参照
尚、資本論の普通の取扱方からすれば、資本論の第二部は第三部の資本制生産の総過程に於て具体化される資本主義社会の全貌を理解する為に、第一部より徐々に具体化され行く全叙述の段階的存在である。けれども我々がここでいう叙述の順序というのは一部生産過程、二部流通過程との関連という程の意味である。

七、結 び

ここに言う特殊の生産というのは、生産ということ

を否定するものではない。だから特殊的生产というのは、不生産というのと全く異なるものであることはいうまでもない。

この特殊的生产は、使用価値に対応せる労働過程の観点よりすれば、使用価値生産ではなくて有用的効果の生産であり、価値に対応せる価値形成—増殖—過程の観点よりすれば価値を形成し、したがって剰余価値をももたらし得るのである。かくして内容的には生産過程に属する、その意味で価値形成的な保管費、運輸費が価値形成過程に対応するものとすれば、形式的には流通過程に属する如く見える、その意味で生産過程の継続あるいは追加としてとらえられた特殊な性格が労働過程における有用的効果に対応するものといえよう。

かくして労働過程と価値形成—増殖—過程との統一としての生産過程—資本制—の観点よりするも、あるいは生産過程と流通過程との統一としての資本の総過程からするも、保管費、運輸費を特殊的生产として把握することは、その特異なる性格を表現するものであ

ろう。

この特殊的生产に代えるにむしろ価値形成なる語を以てするが適當であろうとの批評が存するが、価値形成のみでは使用価値に関する部分が見落される。すなわち価値形成は生産過程に属する。その生産過程は使用価値、価値の両者を形成するのが本来である。その一方（価値）のみを形成する点が指摘されて、他の面すなわち使用価値形成の面の特異性が見落されてはならない。価値形成のみでは使用価値形成との関連に於ての特異性が無視されることになる。

この点は特殊的生产となすことによつて、生産でありしかも有用的効果の形成にして使用価値形成に非ざる特異性を表現し得ると共にあわせて、生産過程の継続あるいは追加として把握らるべき特殊性をも明かにし得る意味において特殊的生产が好ましいと考えるものである。

なほ小論においては運輸費と保管費とを空間、時間の克服に関する費用として一しよに取扱つた次第である。以上